☆小さな運命共同体☆

哀ｌｏｖｅコナン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

☆小さな運命共同体☆

【Ｎコード】

Ｎ４７６７Ｚ

【作者名】

哀ｌｏｖｅコナン

【あらすじ】

短編集として書きたかったんですが、あまりにも長くなり過ぎて…連載にしました☆☆

予定していたものプラス少し加えて、コ哀小説を今度は連載して行きます。

医療全く無視をしたコ哀です。ネタバレになるので、どっちかで言っておきます。どっちかの死ネタになりますので、ご注意して読んでください。

前作見ていただいた方はわかると思いますが、またあの優しい先生が出てきます。

コ哀を好きな人にとっては怒られるかもしれないですが、嫌な人はここでスルーしてください。

そして、今回は一話一話が短いと思います…前作と比べると…それと、あくまでコ哀なので、新一や新一の両親などの登場はありません…服部も（今の段階では）出てこないと思います。

それを含め、大丈夫な方のみ…閲覧お願いします。

☆ｖｏｌ．１　プロローグ～運命…それは…変えたいもの☆

運命……それは、一人一人が神様によって授けられたもの…。

運命……それは、自分自身でどうにでも変える事が出来るもの…。

きっと、これもまた…”運命”なのかもしれない…。

”工藤君…私は貴方に…何もしてあげられないのよ…”

”お前は生きてくれてるじゃねーか…それだけで充分だよ…”

その言葉を交わした君と僕との間には…何があったんだろう?…その言葉…ちゃんと君に伝わったのかな…いつだって、励ましていたはずだったのに…。

でもこれが…君と僕の…最後の物語になってしまったんだね…。

君の運命を僕は変える事が出来たのかな…本当に君は…それで幸せになれたのかな…。

でも、君にあんな運命背負わせたくなかったんだ…だから、君の運命を…僕が変えてあげたかったんだ…。

だから、お願い…僕がした事、許して欲しいんだ…。

そして…生きる事を諦めないで……お願いだから…なぁ、灰原！！

☆ｖｏｌ．１　プロローグ～運命…それは…変えたいもの☆（後書き）

始まりました。
プロローグなので今回は短いです…。

読んでもらって嬉しいです。
今回は不定期になりますが、よろしくお願いします。

時間があれば、それほどあかず、投稿できるとおもいます。

また、今回もヒントを残して、
次に進みたいと思います。

次回ヒント
準備したい事

次回、またよろしくお願いします。

☆vol.2　診察結果☆

ある平日の朝…。

とある病院に来ていたコナンは、診察室で…蘭と小五郎が見守る中…医師によって、胸に聴診器を当てられていた…。

「うん…大丈夫だね。順調、順調…」

コナンの胸に当てられていた聴診器を離しながら、今度はコナンの頭に手を当てて微笑む先生の名は坂井医師…。

コナンが最も慕っている…コナンの主治医でもあった…。

「コナン君、こないだの話なんだけど…そろそろ、準備したいんだ…返事聞かせてもらえるかい？」

「まだ、大丈夫だよ…」

そう話すコナンは何となく、淋しそうな表情を浮かべて俯いていた…。その様子に見兼ねた坂井医師は、コナンに言った。

「…ねぇ、コナン君…先生、ちょっと毛利さんと蘭さんに話がしたいから…コナン君は先に戻っていてもらえるかい？」

「僕だけ…内緒の話？」

不安な面持ちで坂井医師の顔を覗き込むコナンを見た坂井医師は、にっこり笑いながら…コナンの頭を撫でながら言った…。

「違うよ…コナン君が納得してもらえるように…相談しなきゃだか

ら…それに、早くしないと取り返しのつかない事になっちゃうからね…」

「…うん」

突きつけられた自分の現実に、コナンは納得したくなくても、頷くしかなかった…。

そんなコナンを見た蘭はコナンの顔を覗き込んで、諭すかの様に話出した…。

「コナン君、大丈夫よ…すぐ行くから、病室でちゃんと待っててて…」

そう言われたコナンが診察室を後にした後、坂井医師は小五郎と蘭に話を始めた…。

「先日もお話ししましたが…コナン君の手術の準備をそろそろ取り掛かりたいと思うんですが…」

そう話す坂井医師だったが、コナンの事を思うあまり…自然と目が泳いでいた…。

「手術自体は、そう難しくないんですが…コナン君が手術を拒んでる今の状況では、こちらとしても手術を行えないんです…ですから、毛利さん達から説得してもらえませんか?」

コナンに病気の事や手術の事を話してから、コナンがずっと手術を拒み続けている事を坂井医師は心配していた…。

でももう、時間が限られている…そんなコナンの手術に、坂井医師は少しばかりの焦りを感じていた…。

「でも、先生…私達が言っても…コナン君、分かってくれないと思うんです……だから、先生から話してもらえるといいんですけど…？」

蘭はコナンの性格を分かっていた…蘭達が手術の事を話しても”大丈夫”と言って、聞く耳を持たないかもしれないから…。

だから、先生からもう一度言われた方が分かってくれると、確信していた…。

☆vol.2　診察結果☆（後書き）

今晩わｗｗ
今日は変な時間に投稿ですｗｗ
一応、ストックが溜まって来たので
しばらくは毎日投稿になるとおもいますｗｗ

次回ヒント
哀ピンチ

次回もお楽しみに☆

☆ｖｏｌ．３　いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔☆（前書き）

今回、コナンは出て来ませんｗｗ
明日までお待ちくださいΣ（゜д゜lll）

☆ｖｏｌ．３　いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔☆

「分かりました…」

蘭の頼みを聞き入れた、坂井医師はコナンにもう一度…手術の事を受け入れてもらえるように…蘭と小五郎を連れ、コナンが戻ったであろう病室に足を運んだ…。

コナンの病室の扉を開ける坂井医師は、目を見開いた…。

「あれ？コナン君？」

病室に戻るように言ったはずのコナンの姿がどこにもなかった…。

そればかりか、置いてあったはずのランドセルが、見当たらない事に気付いて…坂井医師はため息を一つした…。

「あのガキ…どこ行きやがった！！蘭、お前はここにいろっ…」

そう言って、コナンを連れ戻しに行こうとする小五郎を坂井医師は止めた…。

「まぁまぁ、毛利さん…今すぐどうこういう問題ではありませんから…とりあえず、様子を見て見ましょう…コナン君ならきっと大丈夫ですから、帰ってくるのを待ちましょう？それに……」

そう言って、腹を立ててる小五郎を落ち着かせた…そして、ひと呼吸置くと、再度口を開いて言った…。

「行き先は…分かってますから…」

一方、阿笠邸では…自分自身に降りかかる悪魔が徐々に詰め寄ってる事に気づかず、哀はいつもの朝を過ごしていた…。

「博士…コーヒー、ここに置いとくわよ…」

「ああ、すまんな哀君……」

そう言うと、哀の差し出したコーヒーに手を伸ばし、それを口にするのを見た哀は…フっと笑い、嫌みをいいながら玄関へと歩き出した…。

「じゃ、私は学校に行ってくるわ…博士…私がいないからと言って、高カロリーな物食べ過ぎないようにね…」

「分かっとるわい…」

そういいながらも、残念そうな顔をする博士の顔を振り返って見た次の瞬間…哀は胸を抑えしゃがみこんでしまった…。

驚いた博士は哀に近づき、心配な面持ちで声をかけた…。

「哀君…どうしたんじゃ？」

「何でも…ハァ…ないわ…ハァ…いつもの事よ…ハァ…すぐ治まるわ…」

「いつも？」

驚いた博士は、哀の発言に耳を疑った…。

「最近、良く…ハァ…あるのよ…でも、大丈夫よ…ハァハァ…心配…ないわ…」

苦しみながら、心配する博士を気遣う哀…暫くすると、本当に苦しさは治まった様子で…強張らせていた顔も正常に戻っていた。

それに安心していた哀はゆっくり立つと、”ね？”といった感じで笑って見せた…。

そんな哀の様子に不安になり、哀に病院へ行く様に勧めた…。

「平気よ…それより、博士…工藤君から何か聞いてない？」

「新一？何をじゃ？」

「2日も学校休んでるのよ…まぁ、博士が聞いてないなら問題ないと思うけど…じゃ、行ってきまーす…」

博士の心配をよそに、哀はなにもなかったかの様に平気な顔をして学校に向かった…。

閉まる扉を目にして、哀やコナンの事が心配になった博士は…暫くその扉の前で一人、佇んでいた…。

☆ｖｏｌ．３　いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔☆（後書き）

次回ヒント
噂の人物

今晩わｗｗ
今年も残り３日になりましたね☆

今日はスペシャルばかりで、何をみようか迷ってしまいますΣ（ ゜д゜lll）

始まってまだ間もないこの小説なんですが、死ねたというのを了承して読んでいただき＆お気に入り登録や感想いただき、ありがとうございます。

励みになります。
では、また明日の投稿をお待ちください☆

☆ｖｏｌ．４　噂をすれば…登場☆

哀が教室の扉を開け、入ろうとした時…歩美、元太、光彦は哀の姿に一目散に駆け寄った…。

「哀ちゃん！！おはよー」

「灰原さん、おはようございます…」

話があると言わんばかりに、哀の顔をじっと見つめる三人に…哀は不思議に思いながら、平静を装って聞いてみた…。

「おはよ……どうしたの？そんな顔して…」

「哀ちゃん…またコナン君お休みだって…」

「えっ？？そう…」

言いたい事は分かっていた哀だったが、休みと聞いて…少しばかり心配が募っていた…。

「昨日、俺ら探偵事務所に行ったんだ…でもよ、家んなか真っ暗で…誰も居なかったんだよ…」

「何かあったんでしょうか？」

コナンの事が心配で堪らない少年探偵団…コナンが居るはずの探偵事務所に行っても誰もいないなんて事…今まで会ったんだろうか？

そんな光景を目の当たりにした三人が、不安がらないはずもなかった…。

哀はそれでも、心配させない様にと諭しながら話始めた…。

「何言ってるのよ…彼なら大丈夫よ、ただの風邪でしょ？病院にでもいってたんじゃない？」
「でも…」
「だいたい、何かあったなら私達に言って来るでしょ？そういう人でしょ？江戸川君は…」
そういって、三人を凝視した…。そんな哀を見て三人は泣く泣く頷くしかなかった。
「はーい、みんなー、席に着いてーー出席を取るまえに報告です。今日もコナン君は風邪でお休みだそうです…でも、心配しないでね、ただの風邪みたいだから…」
小林先生は、教室に入って来るなり、教室にいる生徒達に報告した…。その言葉に、三人は騒ぎだし、後ろの席にいた元太が光彦に声をかけて来た。
「なぁー、今日も帰り寄ってみよーぜ？」
「そうですね…」
「皆で行こー！！」
三人がそんな言葉を交わしている時…教室の扉が開いた……。
「おはようございます…」
顔を出したのは、噂をすればのコナンだった……。
「コナン君！！」

コナンの休む連絡を受けた直後の出来事だったので、さすがに皆驚いていた…。

小林先生がコナンに近寄り、自分の額とコナンの額を触り、見比べていた…。

「熱はないみたいだから、大丈夫そうだけど…」
「大丈夫だよ…もう治っちゃったから…」
「でも、無理しちゃダメよ？」
「うん、分かった！！」

そう言葉を交わすと、コナンを席に着かせた…。

席に着いたコナンは哀に”よっ”と、挨拶すると、哀は無駄な心配させられた事に不機嫌になり…瞳だけコナンの方に向かせると言った。

「余計な心配させてんじゃないわよ…」
「なんだお前、心配してくれてたのか…」
「私じゃないわ…あの子達によ…朝から大変だったんだから…」
「……」

哀にそう言われたコナンは、ゆっくり三人の方へ視線を移すと、三人は心配な面持ちでコナンの方を見ていた…。

☆ｖｏｌ．４　噂をすれば…登場☆（後書き）

こんにちはｗｗ

とうとう残り2日を切りましたねｗ

来年はどんな一年にしようか、考えさせられます。

今日はもう一話、夜に投稿予定です。

仕事がない日は、こうも一日の投稿が長く感じます。

では、また夜に会いましょう＊・゜゜・＊:.｡｡｡.:＊・゜゜・＊:.｡｡｡.:＊・゜゜・＊

（＊゜▽゜＊）ﾉ・＊:.｡｡｡.:＊・゜゜・＊:.｡｡｡.:＊・゜゜・＊

次回ヒント

倒れる

☆vol.5　病魔の発覚☆

「コナンくーん、哀ちゃーん！！」
「帰りましょー！！」
「行こーぜー」

授業が、終わり…帰る支度をしているコナンと哀に向かって言葉が投げかけられた…。

「おう！……帰ろーぜ、灰原…」
「ええ…」

そう言ってランドセルを背負うと、五人揃って…久々の下校を共にしていた…。

そして……これが最後の五人揃っての下校になるなんて、この時は知る術もなかった…。

「大丈夫ですか？コナン君…」
「ああ、平気だよ…悪かったな…心配かけちまって…」
「いえ…では、僕達こっちですから…」

そう言う光彦を先頭に、曲がり道に差し掛かった三人は二人に手を降り叫んでいた…。

「また明日会いましょう…」
「哀ちゃん、まったね～」

「じゃーなー、コナン！！無理すんなよ！！」

そう言う三人に、コナンは大きく手を降り…哀は顔だけ向いて微笑んでいた…。

「わーってるよ、じゃーなー」

二人だけになって…哀は漸く本題を切り出す事が出来た。

「ねぇ、今朝何で遅刻して来たの？」

「ああ、ちょっと寝坊しちゃって…」

分かりやすい嘘をつくコナンにジト目で見る哀は…目線を戻すと言った…。

「遅刻…それで私が納得すると思ってるの？」

「まぁ、いいじゃねーか…あっ、じゃーな…」

「ちょっと…」

丁度曲がり道に差し掛かり、哀の言葉を無視して…コナンは探偵事務所の方へ歩いて行った…。

呆れながら、哀もまた帰り道を歩いている時…胸の痛みを感じた哀は、ドサッと音を立てて…その場に倒れこんでしまった。

それを感じたコナンは急いで哀の元へ駆けつけた…。

「おい、灰原…どうした？」

「ううっ…痛い…胸が苦しい…痛いっっ…」

コナンは心配な面持ちで、駆け寄り哀に声をかけるが、哀は更に胸を押さえて苦しみ出した…。

「おい、灰原…しっかりしろ…」

「ううっ…」

「灰原!?灰原ぁぁぁぁーーー!!」

コナンの叫び声が響き渡る中、哀はただただ、痛みに耐えていた…。

☆ｖｏｌ．５　病魔の発覚☆（後書き）

次回ヒント
治療中

こんばんわ、実は、この中に出てくる坂井先生はＺＡＲＤから取りましたｗｗ
１４年位、ファンなのです（＾ー＾）ノ

では、今日はとっても寒いから、みなさん風邪に気をつけてくださいねｏ（＾▽＾）ｏ

☆vol.6　心配になるコナン☆

哀が倒れたのを目にしたコナンは急いで自分の携帯で救急車と、阿笠博士に連絡した…。

直ぐに救急車が到着して…コナンも一緒に付き添っていた…。

救急隊員による処置を施されながら、コナンは哀の顔だけを見続けていた…。

病院に着き…ストレッチャーに乗せられ、治療室に運ばれる哀を追いかけながら、賢明に声をかけるコナン…。

「灰原!!」

身長が足らず、哀の顔を見る事ができないコナンだったけど…哀の苦しむ声だけは耳に届いていた…。

「坊や、ちょっとここで待っててね…」

治療室の前まで来ると、看護婦さんがコナンに声をかけた…その声に一つ頷くと、治療室に運ばれる哀の乗ったストレッチャーをずっと眺めていた…。

「コナン君…ダメじゃないか、走ったりしちゃ…」

その声に振り向くと…坂井医師が何時の間にかコナンの後ろに立っ

ていた…。

「先生……」

「先生の勘違いだったみたいだね…コナン君が倒れて…自分で救急車呼んだのかと思って…毛利さんに連絡しちゃったよ…」

コナンの目線までしゃがむ坂井医師はコナンの顔を覗き込むと言った…そんな坂井医師の顔を一度見ると…再びコナンの目線は治療室へ向いた…。

「君の、友達かい？」

そう言われ、一度俯いたコナンだったが…もう一度坂井医師の顔を見ると言った…。

「先生…灰原…大丈夫…だよね？」

「まだ、治療中だからね…担当の先生が出て来ないと分からないな…」

「そう…」

コナンの頭に手を置きながらそう言う坂井医師の言葉を聞いたコナンは寂しそうに俯いた…。

「こら、コナン！！」

その時、連絡を受け蘭を連れてやって来た小五郎に、コナンは鉄拳制裁を下された…。

「痛いよ、おじさん！」

「あったりめーだ！！誰が学校行けって言ったんだ！！病室に戻れ

って言っただろーうが！！」

「お父さん！！いいじゃない、ちゃんと戻って来たんだから…」

その光景に見兼ねて、坂井医師はコナンの手を握ると言った…。

「まぁまぁ、とりあえず一度診察室へ行きましょう？もう分かったよね？コナン君…？？」

「うん…」

坂井医師の言葉に頷くと、コナンは頭を摩りながら…診察室へ連れていかれた…。

☆ｖｏｌ．６　心配になるコナン☆（後書き）

こんばんわ→→ｏ―●´∀、―ｏ→→
今年最後の投稿となりました☆

今年も残すところｗｗｗｗ
３時間切りましたねへ（＾＾へ）（ノ＾＾）ノ
ガキ使見てる人、紅白見てる人…それぞれですが…皆さんが気持ちのいい新年になるといいですね★´∀、★

また、来年会いましょう（＊´∀）ノ；・・＊-＋＊・・，；／
皆さん、よいお年を８（＾∇＾８）（８＾∇＾）８””

では、今年最後のヒントにいきたいと思います☆

次回ヒント
約束

ですｗｗ
新年初投稿をお楽しみに？？

☆ｖｏｌ．７　僕の約束聞いてくれない??☆

「コナン君、息吸って…はい、吐いて…」

コナンは服をめくり、聴診器を胸に当てられながら…坂井医師の合図にゆっくりと呼吸をしていた…。

「先生…」

診察が終わったのを見るとコナンは静かに声をかけた…。

「灰原…」

「まだ詳しい事は分からないけど、さっきの様子だと、心臓かな…」

そう聞いて、俯くコナンを見ながらコナンの頭に手を置く坂井医師は静かに忠告した…。

「そろそろ、君も自分の事考えなきゃな…」

「……うん…」

そう言うと、コナンは坂井医師を見ると勢い良く言った…。

「ねぇ、先生!!灰原の担当のお医者さん、先生がなって!!お願い!」

「えっ?どうしてだい?」

「先生だったら、信用出来るから…」

そう言い、俯くコナンを見ながら困った様に言った…。

「でもね、担当の先生は治療した先生がなる事に決まってるからね…」
「お願い！！」
そんなコナンは見兼ねた小五郎が口を挟んで来た…。
「先生を困らせんじゃねーんだよ！！」
「だってーー」
「わかった！担当の先生に頼んでみるよ…で、その先生が承諾してくれたら…でもいいかな？」
「ありがとう、先生！！」
その言葉に、明るい表情を見せ元気よく返事をするコナンを見る坂井医師は、その先生が了承したらという条件で引き受ける事にした…。

治療を終えた哀が乗せられたストレッチャーを見送った後、担当の先生に駆け寄る坂井医師は暫く話した後、コナンの元へ戻って来た…。
「コナン君、今先生と引き継ぎしたからね…君の友達も先生が見る事になったよ…」
「よかった…それで、灰原は？」
喜びと同時に、哀の状態を聞くコナンに坂井医師は説明した…。
「心臓に、爆発を抱えてるんだって…だからね、その心臓が弱くなる前に丈夫な心臓と交換しなきゃならないんだ…」
「灰原死んじゃうの？」

「ドナーが見つかれば大丈夫だよ…」

そういいながら笑顔を見せる坂井医師に、コナンは言った…。

「ねぇ、先生…僕、ちゃんと自分の事考えるから…約束聞いてくれない？」

「……」

坂井医師はコナンの口から出た言葉に耳を疑った…。

「それは、君が考える事じゃないよ…コナン君…」

☆ｖｏｌ．７　僕の約束聞いてくれない？？☆（後書き）

皆さん、あけましておめでとう
ございます（＝´∀｀）人（´∀｀＝）
今年も引き続き、小説サイトにて、
更新に励みたいと思いますので☆
よろしくお願いします（＊＾＾＊）

では、新年初の更新ですｗｗｗ
読んでいるとわかると思いますが、
だんだんと、コナンが何を決めようと
しているかが、わかってくるとおもいます。

次回ヒント
涙

明日もお楽しみにｗｗ

皆さんにとって今年一年が素敵な
年になります様に☆

☆ｖｏｌ．８　誰にも止められない涙☆

「阿笠さんですか？」
「はい、それで哀君は？」
「こちらです…どうぞ…」

コナンの連絡で漸く駆けつけた博士は先生の案内の元、病室に向かった。

「博士…」
「哀君…やっぱり、今朝病院行った方が良かったんじゃ…」
「仕方ないじゃない！！こんな事になるなんて思わなかったんだから…」

その会話に不思議に思ったコナンはベッドに近づき言った。

「今朝って…何かあったのか？」
「別に…たいした事じゃないわ…」
「教えろよ！」
「何でもないって言ってるじゃない！！」

それ以上聞いても無駄な事を察知したコナンはそれ以上何も言わなかった…。

「灰原哀さんだね…これから君の治療に携わる事になった坂井と言います…宜しくね！」
「……」

坂井医師の挨拶に哀は何も言わず、不機嫌なまま凝視していた…。

「先程の治療でね…君の心臓が原因だと分かったんだ…まずはドナー登録をして、君の心臓に一致するドナーが現れるまで入院して待とう？先生も一緒に頑張るから…」

「ドナーが現れなかったら？私は死ぬしかないのよね？」

坂井医師の言葉に、涙目になる哀は興奮して叫び出した。

「知ってるわよ、ドナーの事！！一致する心臓なんて、一握りだそうじゃない！何年待ってもドナーが現れないで死んで行く人だっているのよ！」

「灰原さん！」

「いいのよ…もう…私は…死ぬのを待つしかないんだから…」

哀は両手で顔を覆い、酷く落ち込み泣き出した…。

それを聞いていたコナンは博士の名前を震える声で呼んだ…。

「博士…」

「大丈夫じゃ、見つかる…きっと…」

その後何度も坂井医師は励ますが、哀は一向に顔をあげてはくれなかった…。

「とりあえず、ドナー登録の申請をしよう…もしかしたら、現れるかもしれないからね…阿笠さん、手続きをお願いします…」

「はい…」

博士は坂井医師に連れられて病室を出て行った…。

残ったコナンは哀のそばに近寄った…。

「灰原…大丈夫か??」

「ええ…今の所は生きてるんじゃない?」

まるで他人事のようにいう灰原をコナンは元気付けようとしていた…。

「大丈夫だよ、灰原…ドナー申請したんだし、きっと見つかるさ…」

「見つからなければ私は死に落ちるのよ…いい気味よね、本当…」

「やめろよ、そういう言い方…お前らしくねーぞ!!」

自分のことを卑下する哀にコナンは賢明に励ますが…哀の心には届きそうもなかった…。

「出てってくれない…」

「灰原…」

「出てってよっっ!!私の気持ちなんて貴方なんかに分かりっこないのよ!!うっ…」

そうコナンに叫んだ後、哀は再び両手で顔を覆って泣き出した…言葉を失ったコナンはただただ、哀を見つめるしかなかった…。

「また…来るから…」

そう言って、返事をしてくれない灰原を一人病室に残してコナンは静かに出て行った…。

病室の扉を閉め、寄りかかるコナンは俯いて拳を握りしめた…。

助けたくても助けられない自分の不甲斐なさを悔やみながら…。

☆ｖｏｌ．８　誰にも止められない涙☆（後書き）

こんばんわｗｗｗ

正月休みでダラダラしている
今日この頃ですｗｗｗ
小説を毎日書いていると、突然
書きたい内容は頭の中に有るのに
言葉が出てこないって言う事が
ありますｗｗ

そういう時って休んだ方がいいんだな
って後回しするのが一番ですねｗｗ
正月ボケが祟ってるのかもしれませんがｗｗ

ではでは、余談はこれ位にしてｗｗ

次回ヒント
帰ろう

次回もまた
よろしくお願いします。

ｐ．ｓ
始まってまだ間も無いこの小説にｗｗ
お気に入りや感想、ポイントいただいて
ありがとうございます。
それを励みに頑張って行きたいと思います。
よろしくお願いします／（＾ｏ＾）／

☆ｖｏｌ．９　言わなきゃいけない、最後のお願い☆

「コナン君…」
「お前ら…どうして？」

哀の病室の前で佇んでいたコナンは突然の訪問者に驚いていた。

「博士から聞いたんです……あの、灰原さんは……？」
「あいつ、酷く落ち込んでるんだ…だから、今はそっとしておいてやってくれないか？？」

病室に目をやりながら、三人に話すコナンはなんとなく、悲しい目をしていた。

それに気づいた光彦はコナンの顔を覗きながら言った…。

「灰原さん、何かあったんですか？？」
「……実はな…」

そう話そうとした時、コナンを呼ぶ声がして振り向いた…。

「蘭ねーちゃん……」
「哀ちゃん、どうしたの？？」

蘭は病室に目をやりながら、コナンに尋ねた…。

蘭の問いに言いづらそうに俯いて、黙ってしまったコナンを見て…何かあったと察した蘭は、にっこり微笑みながら、コナンに手を差し伸べた…。

「コナン君、帰ろう?病室に……」

そう言った蘭の言葉に、近くで聞いていた三人は驚きながら、聞いた…。

「病室って??」

「誰のですか??」

尋ねてくる三人に、コナンは勢いよく振り向き…蘭も三人の顔を見ると少し微笑んで言った…。

「皆も来て…」

そして、コナンも蘭の発言に焦り…三人に知られたくない一心で蘭に助けを求めるかの様なか細い声で名前を呼んだ…。

「蘭ねぇーちゃん…」

「隠しててもいずれバレちゃうんだから…言わなきゃダメよ…皆にも聞いてもらおう?」

そう言った蘭の手を握り、仕方なく病室に戻る事にした…その後を黙ってついて行く歩美、元太、光彦は何が起こっているのか…不思議でたまらない心境だった…。

病室に戻ったコナンを待ち構えていた小五郎は蘭に手を引かれ戻ってきたコナンをニヤリと見て詰め寄ると言った…。

「よし、コナン！先生とこ行くぞ！！」
「まだ、大丈夫だよっ」
小五郎の言葉に、いつものように手術の事を言われるかと思っていたコナンはそう叫んで逃げ出した…。
そんなコナンをあっさりと捕まえると、小五郎はコナンを抱きあげると診察室へ向かった…。
「やだよ、おじさん！降ろしてよ！！」
「黙って来んだよ！！」
診察室の先生の所へ行くのが嫌で、行きたくないの一点張りの様子のコナンは小五郎に向かって叫んでいた。

そんなコナンの反抗も虚しく、診察室の扉が開かれた…。
「やあ、コナン君…今度こそ、聞かせてくれるかい？？君の返事……」
コナンに問いかける坂井医師の後ろから心配な面持ちで顔を出した、歩美、元太、光彦の存在を確認すると…にっこりしながら、コナンの頭に手を当てて言った。
「そうか、今まで手術を拒んでいたのは…友達に知られたくなかっ

たからかな??コナン君?」
「先生!!僕、先生にお願いしたい事があるんだ!!」
コナンに向けて微笑む坂井医師とは反対にコナンの瞳は真っすぐと、そして真剣に坂井医師の方へ向けられていた…。
「先生、お願い!!僕の最後の約束を聞いてほしんだ!!」
これ以上にない真剣さに…坂井医師は、その瞳を暫く黙って見つめていた…。

☆ｖｏｌ．９　言わなきゃいけない、最後のお願い☆（後書き）

今日は凄い寒くなりましたね☆
まだまだ、正月気分が抜けず寒さを雑煮でしのいでいる．今日この頃です。

休みと言う事も、あり…この時間に投稿できるということもあり…もう一話、夜中あたりに投稿したいなぁと思いつつ、自分の行動を制御しています。

では、次回ヒント
本気だよ

次回もまたお楽しみに☆

☆ｖｏｌ．１０　コナンの強い意思と想い☆

「約束って、さっきの事かい？」
「うん！！」

コナンの真っ直ぐな瞳を見つめ、困った様な表情を浮かべる坂井医師は…コナンから目線を反らして言った。

「さっきも言ったけど、それは君が考える事じゃ…」
「分かってるよ！！でも、どうしても…守りたいんだ！！あいつを助けたいんだよ！！」

その会話に、何の話をしているのか分からない小五郎達は先生に問いかけた…。

「先生…あの、いったい……」

その言葉に、暗い表情を浮かべると…コナンを見つめた…。

「言っても、いいよ…」

コナンの言葉に、更に不安な表情を浮かべる坂井医師は小五郎達の方へ向き直ると、コナンに言われた約束を話した……。

「……という訳なんです…友達の事を思う気持ちは分かりますが…とてもじゃないけど、承諾しきれません…」

先生からの話を聞き終わると…さすがに、驚きを隠せない様子でその場にいた全員がコナンを見つめていた…。

「コナン君…お願いだから、お友達の事は先生に任せて…君は手術をしてくれないかな…ドナーだって現れる可能性あるんだしね！！」

「現れなかったら？現れなかったら、あいつは死んじゃうんだよ！！だったら…」

「コナン君！！」

先生の説得も虚しく、コナンは頑として意見を変える様子もなかった。

それよりも、哀を守る事ばかりを考え…元太達や蘭の説得さえも決して首を縦に振ることはなかった…。

「お父さん…」

そして蘭が小五郎に助けを求めると、小五郎はコナンの胸元を掴み…睨みつけながら言った…。

「お前！！本気なのか！！」

「本気だよ！！」

「もう一度、考え直せ…後悔しても知らねーぞ！！」

「後悔なんてしないよ！！僕が決めたんだから！！」

「やっぱりやめるっつっても、もう手遅れになっちまうんだぞ！！それでもいいのか！」

「そんな事言わないよ！！」

睨みつける小五郎の言葉に、頑なに意見を曲げないコナンを見て、小五郎のコナンの胸元を掴む手に力が入る…。

「本気…なんだな！」
「うん！！」
小五郎のその言葉に勢いよく頷くコナンを見て、瞳を濡らすと…コナンの胸元を掴んでいた手を離し…コナンに背を向けた…。
「勝手にしろっ！！」
そんな小五郎を見た蘭はコナンの肩を掴み…自分の額をコナンの額に当てながら、潤んだ瞳を輝かせてもう一度ゆっくり話した…。
「ねぇ、コナン君…もう一度、もう一度よく考え直して…貴方がいなくなったら、悲しむ人だっているのよ…」
「僕、もう決めたんだ！！あいつを守れるの、僕しかいないから…最後まで、あいつを励まさなきゃいけないから…それに今、あいつすっごく落ち込んでるからさ…だから…ごめんね、蘭ねーちゃん……」
コナンの言葉一つ一つに重みを感じて…それ以上は反対できなかった…コナンの言葉を聞きながら、肩を震わせ…閉じた瞳から涙がこぼれ出していた…。
「どうして…どうしてコナン君は…」
そういいながら、コナンの小さな身体を抱きしめた…。
「だったら、精一杯…哀ちゃんの事、守ってあげるのよ??」
「うん！！分かった！！ありがとう、蘭ねーちゃん……ごめんね…」

もう、これ以上コナンにいくら説得したとしても…納得なんてしてはくれない…。

誰が何を言っても、決してその決意を捻じ曲げる事なんてできない…。

そう感じた一同は、コナンの意思を悲しくも、受け入れる事にした…。

この先、何があろうとも…コナンはこの時した決意を途中でやめる事なんてしないだろう…。

この先、なにがあろうとも…絶対に…。

☆ｖｏｌ．１０　コナンの強い意思と想い☆（後書き）

こんばんわｗｗ
本日二度目の投稿になります。
休みだと、時間があっていいですね☆
その休みも、もうそろそろ終わるのですが…。

ところどころ、明かさない様な
感じには書いていますが、多分
そろそろわかっちゃいます。
１２話は特にｗｗｗ

では、いつもの行きます（笑）

次回のヒント
すまない

では、また明日
お楽しみに☆

☆ｖｏｌ．１１　コナンの覚悟に流れる涙☆

その様子を見ていた坂井医師は、コナンの方に向きを変えると真っ直ぐと顔を覗きこんで言った…。

「コナン君…私は医師として……君のいう事を受け入れる事は出来ない…出来ないけど……君はもう、意志を変えるつもりなんてないんだろ??」

「うん…!!」

再確認する坂井医師の目をじっと見て、真剣な表情のまま返事をするコナン…。

コナンのその目が、とても力強く…言葉を詰まらせられる…そんなコナンを見て、坂井医師はゆっくりと言い聞かせる様に話だした…。

「コナン君…今を逃せば、君の命を救う事が出来なくなる…この先、病状が悪化すれば、いくら手術をした所で、君を助けられないんだよ?分かってる??」

「うん!!」

そんな事を言っても尚、意志を曲げようとしないコナンを見ると…坂井医師はもう…コナンを止める言葉を失っていた…。

「今は何もなく元気だけど…これから、少しづつ病状が進行する……今よりもずっと辛い思いをする事になるんだよ?覚悟はできてる??」

「うん!!大丈夫だよっその位、分かってるから…」

もう、何を言ってもダメなコナンに坂井医師は諦め、それならばと…コナンの顔を覗き込むと、真剣な眼差しで言った…。

「だったら、コナン君！！これだけは守ってくれないか？？絶対に無理しないって…少しでも、体調がおかしいと思ったら、先生に言ってほしんだ…」

コナンの肩に手を置いて頼む坂井医師の言葉に…少し俯くと、静かに言った…。

「ダメだよ、ダメだよ先生…少し位無理しなかったら、あいつに…灰原にバレちゃうじゃない！！」

「えっ？じゃ…灰原さんには……」

「うん！灰原には…僕の病気の事も全部…黙っててほしんだ！！あいつに言ったら絶対反対されるし…それに、いつか言えたら言おうって思ってるからさ…」

そういい終わると、コナンは坂井医師に笑顔を見せた…。

そんなコナンの浮かべた笑顔を前にした坂井医師は耐えきれず、瞳から涙が溢れ出した…。

コナンは驚き、坂井医師の顔を覗き込んだ…それを隠すように、自分の手で顔を覆い…涙を拭うと言った…。

「すまない…」

初めて見る坂井医師の涙を目にすると…コナンは視線を落とした…。

コナンは分かっていた……自分の行動が周りにいる人達を悲しませ

てるって事を…だけど、どうしても助けたい……坂井医師を泣かせる事になっても、その意志は変える事なんて出来なかった…。

「ごめんね、先生……僕、もう一度あいつの所へ行ってくるよ…」

もうこれ以上、悲しい顔を見たくなかったコナンは足早に診察室を飛び出した…。

☆ｖｏｌ．１１　コナンの覚悟に流れる涙☆（後書き）

こんばんわ☆
昨日の投稿で、結構分かってくれた見たいだったので、よかったです。
次回は少年探偵団にコナンが言い聞かす事になるので、そのセリフから本当に明らかになるといったのですが…もう心配ないようです。
実は、短編で書いた時、読者にも最後の最後まで内緒にしておくストーリーにしてあったのですが、連載にすると一気に読むという事が難しいので、明かしました。
書いていると、読む側に回る事がすごく難しいので、バラさなきゃよかったのにって思ってしまったら、ごめんなさいｗｗ
でも、これから楽しんでもらえたら、うれしいです。
次回ヒント
笑うコナン
それでは、また明日会いましょう（＝、∀、）人（、∀、＝）

☆ｖｏｌ．１２　笑っていてくれよ…☆（前書き）

今回はいつもより、短いです☆
二回に分けて時間をあけての投稿しようと思ったのですが、無理でした☆
その代わり、明日は長いですｗｗ

☆vol.12　笑っていてくれよ…☆

「コナン君!!」

哀の病室へ向かおうと、足を進めていたコナンに歩美は声をかけた…。

コナンは振り向くと、淋しそうな表情をしたまま…目線を三人の方に向けるて言った…。

「ごめんな…隠していた挙句、こんな事勝手に決めちまって…」

「コナン君…どうしても?どうしても…駄目なの?もう、決めちゃったの??」

謝るコナンに対して、歩美は泣きじゃくりながらコナンに訴えるかのような声で聞いた…。

「あいつは…心臓移植しなきゃ死んじまうんだ…だから、もうこれしかないって決めたんだよ…勝手かもしれないけど、あいつを守れるのは、俺しかいないからさ……」

コナンは淋しそうな表情を浮かべながら、三人の方に身体を向けて言った…。

「だから、ごめんな……」

「コナン君……」

そんなコナンの言葉を聞いた三人は涙を堪える事が出来なかった…。

「泣くなよな…俺はさ、俺の前ではさ、最期まで笑っててほしんだ…」
「コナン……」
「頼むよ…俺の最期のお願い聞いてくれないか??」
そんなお願いをするコナンをみると、三人は何も言えず…ただ、涙を流すだけだった…それを見たコナンは微笑みながら明るく言った…。
「ほら、行こうぜ?あいつ、今一人なんだからさ…」
「うん……」
やっとの想いで返事をする三人は顔を見合わせると…コナンに精一杯の笑顔を見せた…そして四人で哀のいる病室へ向かった…。

☆ｖｏｌ．１２　笑っていてくれよ…☆（後書き）

今晩わｗｗ
今日は仕事始めでしたｗｗ始まりだと言うのに、仕事中居眠り状態でした＼（／／∇／／）＼
明日からは気をつけなきゃです（＾Ｏ＾）／

今回は、探偵団との会話でしたｗｗ
コナンの決意に何も言えない探偵団達は、なんだか、さみしそうです（ Ｔ＿Ｔ）＼（＾－＾ ）
書いてる自分が言うのも、なんですがｗｗ

次回ヒントは
諦めるな

です☆今日から仕事初めの人も、明日からの人も、まだ、まだおやすみが続く人も、残りの正月を楽しんでください（＾Ｏ＾）／

明日お仕事の人は、お仕事頑張りましょう☆
また、明日の投稿お楽しみに☆

☆ｖｏｌ．１３　分からねーよ……☆

哀のいる病室の扉を開けると、博士が心配そうな面持ちで哀を見ていた…。

コナン達に気づいた博士は少し淋しそうな表情をして目だけで哀に視線を送った…。

コナン達は哀の側に近寄ると、声をかけた…。

「灰原…」

そういうコナンの声に哀は不機嫌になりながら、冷たく言い放った…。

「出てってくれない??」

「哀ちゃん、あのね…」

「出てってって言ってるじゃない!!」

相当ショックなんだろう…普段言わない歩美の言葉にまでも冷たく言い放つ灰原…見兼ねたコナンは小さく微笑みながら言った…。

「まぁ、そう言うなって…せっかく来てくれたんだぜ??」

「余計なお世話よ…」

「…お前、もう…諦めてんのかよ?」

呆れながら言うコナンの言葉に、灰原はベッドから起き上がり、コナンの方を向き叫びだした…。

「あなたに…貴方なんかに何がわかるのよ！！病気になった事のない人に私の気持ちなんてわかる分けないのよっ！！」

コナンの事情を知らない哀は、コナンに向けて…突き刺さる言葉を投げかけていた…。

「哀ちゃん！！コナン君は…コナン君はね……」

「分からねーよ…」

見兼ねた歩美が言いかけた言葉を遮り、コナンは小さくつぶやいた…。

「分からねーよ！ドナーが見つかるかもしれねーっていうのに、諦めてるお前の気持ちがな！！」

その言葉を聞いた哀は言葉を失って、瞳に溜め込んでいた涙が更に溢れ出し…勢いよく頬を伝った…。

その時、ナースコールから聞こえて来た坂井医師の声で話はそこで終わりになった…。

「コナン君？そこにいるかい？？」

「…あっ、先生…すぐ戻るよ！！」

コナンはそう返事して哀に微笑むと…静かに扉の方へ向かった…。

「灰原…とりあえず、諦めるはやめろよな…また来るからさ…じゃあな！」

そう言って、コナンは静かに扉を開けて病室を後にした…。

コナンがいなくなった後の病室の中で、哀と阿笠博士と少年探偵団は沈黙の中を神妙な面持ちのまま残されていた……。

「……あなた達も帰っていいわよ…」

沈黙を破ったのは哀だった……。

哀は俯きながら、歩美達の顔を見ずに静かに言った…。

「でも…」

「いいから、帰ってくれない…このままじゃ、あなた達にもっとひどい事言ってしまうもの…」

涙を流しながら訴える、哀を見た歩美達は顔を見合わせると、静かに口を開いた。

「じゃあ、灰原さん…またきますから…」

「元気だせよ…」

「またね、哀ちゃん……」

それぞれに顔をあげてくれない哀にそう挨拶をすると、歩美達もまた静かに出て行った…。

☆ｖｏｌ．１３　分からねーよ……☆（後書き）

こんばんわｗｗ
今日はお祭りだった為、投稿が遅くなってすいませんｗｗ
いつも楽しみにしていただいて、ありがとうございます。
それでは、今回は一言が少ないですが…
次回ヒント
もう一つだけ…

では、また明日お楽しみに☆
もしかしたら、二回投稿するかもです（＾Ｏ＾）

☆ｖｏｌ．１４　行かせて…先生…☆

坂井医師に呼び戻されたコナンは診察室の扉を静かに開けた…。

「やあ、コナン君…悪かったね、呼び出したりして……」

「いいんだ……」

そんなコナンの顔を覗く坂井医師は、あえて聞かず…コナンを診察室の椅子に促した…。

「ねぇ、おじさんと蘭ねーちゃんは??」

「また明日くるって言って、今日は帰ったよ…」

そう聞いたコナンは少し淋しい表情を浮かべて言った…。

「えっ?僕を置いて??」

「何を言ってるんだい、コナン君…君は今入院中なんだよ!!」

笑いながら、コナンに言い聞かせた坂井医師の言葉に目を丸くすると、思い出したかの様に呟いた…。

「あっ、そっか……」

「そっかじゃないだろっ…そんなんじゃ、灰原さんの事守れないぞ??」

半分飽きれながら言う坂井医師に促されながら、服を持ち上げて軽い診察を受けていた…。

「ねぇ、先生…もう一つ、お願い聞いて欲しいんだけど…」
「……怖いな…なんだい？」
診察を終えたコナンは坂井医師の顔を覗き込みながら、恐る恐る聞いてみた…。
「ギリギリまで…学校には、行かせて欲しいんだ…終わったら、ちゃんと病院に帰って来るからさ…」
「……」
「大丈夫だよ、まだ何もないしさ…それに、死んじゃったら学校にはもう行けないでしょ？…この後だって突然いけなくなっちゃうかもしれないしさ…だから今の内に行っておきたいんだよ…お願い、先生！！」
考え込む坂井医師にコナンは必死になって訴えかける様に頼み込んだ…。
「大丈夫！ちゃんと、あいつらのそばにいるから、何かあったら救急車を呼んでくれる様に頼んでおくからさ！！」
黙ってしまった坂井医師にどうにか、分かってもらえる様に…コナンは必死に訴えかけていた……。
そんなコナンに坂井医師は言い聞かせる様に話し始めた…。
「コナン君…君は、もう本当は手術しなきゃいけない身体だ…時間がないって言う事も分かるよね？」
「うん…」
「学校に行かせたら、何が起こるか分からないんだよ…倒れる事だ

って…苦しくなる事だってある…立つ事もできなくなる事だってあるかもしれない…いずれにせよ、危険な事はこれ以上はさせられないよ…コナン君…」

コナンの訴えも虚しく、坂井医師は頑なに学校への登校を許す事は出来なかった…。

「先生…」

それでも、諦めきれないコナンは…カルテにペンを走らせ始めた坂井医師の顔を見ながら名前を呼んだ…。

コナンの小さな声を聞いた坂井医師は、カルテから目を離してペンを置き…コナンの方に体を向けると…言った…。

「じゃあ、2日後…2日間、様子を見て何もなかったら…許可する…何かあったら、大人しく…病室で寝てる事…それでいいかい??」

「先生…」

坂井医師のその言葉に、コナンは嬉しそうに満面の笑顔を向けた…。

「ありがとう、先生!!」

坂井医師に向けたコナンのその屈託のない笑顔が…より、これからのコナンの身体の事を不安にさせられる…。

今は病気なんかなってないと、思わせられる位元気だけど…これからが、コナンの身体の本番になる。

その事を坂井医師は先程の診察を通して再確認し…目の前で笑って

いるコナンの笑顔を目に焼き付けた…。

いつまで…この本当の笑顔を見られるのか…坂井医師は、コナンの笑顔を前にし…複雑な面持ちでコナンの頭を撫でながら、笑顔を返した…。

零れそうな涙を食い止めながら…。

☆ｖｏｌ．１４　行かせて…先生…☆（後書き）

おはようございます☆
今日は仕事がお休みなため、朝からの投稿です（＾Ｏ＾）／いつも今頃、通勤時間ですね☆

寒くてまだ、布団からでられない状況です（＾－＾）／

この頃から、コナンのお願いにビクく先生……まぁ、それでも真剣に聞いちゃうのですがｗｗ

まだ、コナンの病気が進行してない状況での次回ですｗｗ

それでは…

次回ヒント
慌てる

です。誰が慌てるのか、今回の話からは予想もつかないかんじですが、また今日の何処かで投稿しようと想います。

それでは…お楽しみに☆

☆ｖｏｌ．１５　早く行かなきゃいけないんだ……☆

ーー翌々日ーー

夕方、学校から帰ってきた蘭はコナンの病院を訪れた…。

ベットの側に近寄ってみると、両腕を頭の側まで折り曲げながら、小さく寝息を立てて眠っていた…。

「コナン君、コナン君…」

夕飯が運ばれてきたのを見ると、蘭はコナンの体を揺らし起こそうと試みた…。

暫くすると、コナンは重い瞼をゆっくり開けると…蘭の顔を視界に入れた…。

「…蘭ね～ちゃん…」

「おはよ、コナン君…よく寝てたね…夕飯だって…」

そう聞いたコナンは勢いよく起き上がった…。

「今、何時??」

「もうすぐ5時よ…」

「…!!!行かなくちゃっ…」

そう言うと、コナンはベッドから飛び降りた…そして着替えようと自分の服を探していた…。

「あれ？僕の服は？？」
「えっ？？持って帰っちゃったけど…大丈夫よ、明日の朝持って来るから…」
そう言って諭す蘭を見ながら、コナンは困った顔で蘭向かって口を開いた…。
「明日じゃ間に合わないんだよ～、今、必要なんだよ～」
「どうして？」
「灰原の所に行くのに、こんな格好で行ったら、入院してるのばれちゃうじゃない！！」
その騒ぎに生じて、坂井医師が子供用のコートを持って入ってきた…。
そしてコナンに羽織らせると、にっこり笑って言った。
「これで問題ないだろ？？パジャマもコートで隠れるし…でも、夕飯食べ終わってから行きなさい…」
「…あ、ありがと……」
突然の坂井医師の提案に、驚きながら、お礼を言うコナンは…急いで夕食を口に詰め込ませた…。
ゆっくり食べる様に促す坂井医師だったが…”分かってる”といいながら…食べる速度は変わらなかった…。
「いってきまーす」
夕飯を食べ終ると…そう言って、勢いよくベッドから飛び降り…慌

てて病室から出て行くコナンを坂井医師と蘭は顔を見合わせ…笑っていた…。

「コナン君、走らない！！」

「はーい」

そう言って、病院の廊下を走りながら、哀の病室に駆け込んだ…。

食事をしていた哀は突然扉がバンと開いた事に驚き…扉に目をやった…。

「よう…」

「何よ、慌てて入ってきて…死んだと思った??悪いけど、まだ辛うじて生きてるわ…ご心配なく…」

扉を開けた犯人がコナンだと知ると…哀はいつもの様に、コナンに向けて嫌味な口調で言い放った…。

「お前が簡単に死ぬわけねーだろ…悪かったな、今日はちょっと遅くなっちまって…」

「…悪いけど、私あなたの事待ってるつもりなんてないわ…」

「そう言うなって…」

予想通りの口調に、コナンは微笑み…扉を閉め哀の側に近寄った…。

「どうだ?具合は…」

「そう言うの、聞いて欲しくないんだけど…」

「いいじゃねーか、教えろよ…」

具合いを聞かれ、機嫌悪くする哀を心配するコナンだったけど…、嫌味を言う哀を目の前にして…聞かなくても、具合いはいいのはわかっていた。

「別に…普通よ…」

やっと答えてくれる哀に、漸くコナンも微笑む事が出来る…そんなコナンを横目で見ながら、黙々と夕飯を食べ続けていた…。

☆ｖｏｌ．１５　早く行かなきゃいけないんだ……☆（後書き）

こんばんわｗｗ
今日は新年初のコナンでしたね（＾Ｏ＾）／
Ｔｗｉｔｔｅｒしながら、みていたんですが、
皆さん興奮しちゃって、ＴＬが
早すぎちゃいました（＾－＾）／☆
それほど、可愛いですよね＼（／／∇／／）＼
コ蘭は特にｗｗｗｗ
ちなみに私も大興奮でしたｗｗ
あれは、一人じゃないと見られないくらいにｗｗ

次回ヒント
散歩

また明日、
お楽しみに☆

☆ｖｏｌ．１６　明日から学校だ！！☆

夕飯を食べ終わった後の一室で…コナンは再び尋ねた…。

「なぁ…あの…」

「何よ…」

そう聞くコナンはゆっくりと目線を哀の心臓へと移した…。

「…大丈夫だって言ってるじゃない…余計な心配しないでくれない…」

「じゃあさ、散歩行かねーか？？」

コナンは哀の調子が平気なのを再確認すると、満面の笑みで問いかけた…。

「はぁ？」

「行こうぜ…ここに居てもつまんねーしよ…」

「だったら、帰って推理小説でも読めばいいじゃない！！」

「俺じゃねーよ、お前がさ…」

「私の事はほっといてって何度言ったら、分かるのよ！！」

私の事は構わないでと一点張りの哀に、コナンはもう一度恐る恐る聞いて見た…。

「なぁ…灰原……」

「い、や、よっ！！」

「少しだ…」

「嫌っっ！！」

それだけ言うと、哀は布団を被り…それ以上答えてくれなかった…。
コナンはため息をして一言言い残すと…仕方なく、病室を出る事にした…。
「また明日来るからな…」
コナンが出て行ったのを、扉の方に目をやりながら確認した…。
「フンッ」
それだけ言うと、再び布団を被り…不機嫌なまま寝たふりを始めた…。

病室に戻ったコナンに、坂井医師は明日の学校への許可を下す為…入念な診察を行っていた…。
「これなら、許可しても問題ないかな…コナン君…」
「ありがと、先生…」
明日の学校への許可が下りて、一安心しているコナンの手に坂井医師はにっこりしながら、注意事項が書いてる紙を手渡した…。
「これ、明日担任の先生に渡すんだよ…それと、分かっていると思うけど…体育は禁止…少しでも体調が悪くなったら、必ず誰かに言う事…」
「うん、分かった…」

コナンの返事ににっこり笑う坂井医師は、暫くコナンの目をじっと見つめて頭を撫でていた…。

「コナーン！！」

そう言いながら入ってきた少年探偵団に、コナンは微笑みながら振り向いた…。

「おうっ」

「ここに居たんですね、灰原さんの所かと思って行ったんですが、灰原さん、寝てるみたいだったので…」

「いや、寝てねーよ…」

光彦の説明に、否定するコナンに不思議になる三人と坂井医師にさっきの事を話した…。

その話を聞いて初めに声をあげたのは坂井医師だった…。

「えっ？ダメじゃないかコナン君…先生は散歩なんてそんな事許可した覚えないぞ！！」

「でも、中庭くらいならいいでしょ？」

「ダメだよ！！何かあったら、どうするんだい？？」

そう言われ、黙るコナンに先生は再度口を開いた…。

「でも、良かったな…灰原さんが断ってくれて…」

「先生……」

「君にもしもの事があったら、誰が灰原さんを守るんだい？」

「…そうだね…ごめんなさい…」

そう言って観念したコナンはゆっくり俯いて謝った…。

「皆も、明日からコナン君の事よろしくな…ちゃんと見張ってくれ…これ以上、無茶しない様に…」

「はい、任せてください！！」

「俺らがついてるから、大丈夫～なっ？」

「うん！！」

凹んでいるコナン対して、三人は”コナンを守る”と張り切っていた…。

そんな三人を尻目にコナンはどうにか明日の登校の許可を下された事に、安堵していた…。

そして残り少ない自分の命を、どう生きようかと…コナンはその気持ちに立ち向かっていた…。

☆ｖｏｌ．１６　明日から学校だ！！☆（後書き）

こんばんわｗｗ
いつも、感想ありがとうございます（＾＾）
とても励みになっています（，　▽　、　）ノ
返信が遅くなる場合もありますが、気長に待って頂けると倖です。
だいたいは、ここを開いたらすぐに返せるんですが…。

改めまして深夜の投稿になります。

休日になると、ダラダラしてしまってダメですねｗｗ

次回ヒント
不機嫌

また夜当たり??
になると思いますが、お楽しみに（＾－＾）／

次回は少し、短いです＼（／／∇／／）＼

☆不機嫌なコナン☆

「おはよ、コナン君…はい、熱計って…」

そう言われ、体温計を脇に挟むコナン…再び看護婦さんの方に目をやると…聞いた。

「ねぇ、なんで僕入院しなきゃいけないの??まだ、何もないのに…」

「何かあったら、困るからよ…」

「何かあってからでもいいじゃない…」

「それじゃ、遅いの…だめよ、わがまま言ったら…」

体温計が鳴るのを待つ間…看護婦さんに、文句を言うコナンは…学校の許可が下りた事で…自宅から通いたくなって来ていた…。

「僕、元気だよ?」

そんなやり取りをしてる内に体温計が鳴って看護婦さんによって、平熱が確認された…。

「大丈夫ね、じゃあ…お姉さんが迎えに来るまで待っててね…」

「いいよ、自分で行けるから…」

そう言うと、夕べ蘭がこっそり置きに来ていた服に着替えると…ランドセルを背負って病室を飛び出した…。

「まちなさい、コナン君!!」

「いってきまーす…」

急いで走り出したコナンはその時丁度やってきた蘭とぶつかって、尻もちをついた…。

「コナン君…もう、待っててって言ったじゃない！！はい…」

そう言って、コナンに手を差し伸べた…。

「それじゃ、いってきまーす…」

そう挨拶する蘭に連れられて、今度は大人しく学校に向かった…。

「蘭ねーちゃん…迎えに来なくていいよ…」

「いいじゃない、一緒に行こうよ…」

「どうせ、僕の事が心配なんでしょ？何かあったら困るから…」

「…コナン君…どうしたのよ…」

いつもと違って少し不機嫌なコナンに少し心配になっていた…。

「探偵事務所から学校に行きたいんだよ…」

「…じゃ、後で先生に聞いてみよっか？」

「えっ？…う、うん…」

口から出た我儘によって、怒られるかと思っていたコナンだったが、蘭に優しく諭され、目を丸くした…。

☆不機嫌なコナン☆（後書き）

次回ヒント
ひどい

また夜に来まーす☆

☆ｖｏｌ．１８　熱を隠すコナン☆

「じゃ、俺…先生の所に行って来るから…」
「分かりました～」
「先、行ってるぜ」
「おうっ」

無事に学校が終わり、歩美達にそう言葉を交わした後…コナンは坂井医師の居る、診察室に向かった…。

コナンはゆっくり診察室の扉を開けると…そこには、コナンの帰りを待ち望んでいた坂井医師が居た…。

「どうだった？学校は？」
「大丈夫だよ…ちゃんと帰ってきたじゃない！！元気だよ…」

体調の事を聞かれたと思ったコナンは賢明に何もない事を訴えた…。

「そうじゃなくて…楽しかったかい？」
「あっ、うん！！」

そう答えるコナンに坂井医師は安堵した…しかし次の瞬間、コナンの顔色が良くない事に気づいてコナンの額に手を当てようと伸ばした…。

「だ、大丈夫だよ…」

そういいながら、坂井医師が伸ばす手を避けて…両手で自分の額を

覆った…。

「コナン君、ちょっと来なさい…」

「僕、灰原の所へ行かなきゃだから、またね…」

そう言って出て行こうとするコナンの手を掴み、後ろから体を抱き込むと…強引に額に手を当てた…。

「やっぱり…熱あるじゃないか…隠しちゃダメだろ、コナン君…」

「ひどいよ、先生…」

不意を打たれたコナンは坂井医師の言葉を聞き流し…抱き込まれた身体を摩った…。

そんなコナンの背中を押しながら、病室に戻るように促した…。

「まだ、灰原の所へ行ってないんだよ!!」

「でも、熱があるよ…」

「ただの風邪だよ…灰原の所に行ってからでもいいでしょう?」

少し熱が高いくらいだった為、坂井医師は…コナンにマスクを装着させた…。

「じゃ、先生も付いて行くよ…」

そう言って、コナンの手を握り…哀の病室まで歩き出した…。

☆ｖｏｌ．１８　熱を隠すコナン☆（後書き）

こんばんわｗｗ
とりあえず、今日はこれで
ラストになります。

次回ヒント
待ってて

また明日…
投稿するのは昼間か…夜かに
なると思います。

楽しみに待っててください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4767z/

☆小さな運命共同体☆

2012年1月8日22時50分発行